別紙 2

審査の結果の要旨

論文提出者氏名　森永　豊

森永豊氏の博士学位請求論文「私秘性と公共性の自己論—一人称代名詞の諸研究を手がかりに」は、私秘的な側面と公共的な側面を併せもつ「自己」のあり方に関する哲学的探究を、従来の「他我問題」に囚われた議論の枠組みから解放し、独自の仕方で刷新することを企図する意欲的な論考である。そうした企図のもと、言語習得に関する発達心理学の諸研究から現象学的自己論に至る幅広い文献に学びながら、一人称代名詞の意味論に関する現代の言語哲学における先端的議論を、大胆に更新することが試みられる。その本論は、以下のような第 1 章から第 4 章までの全 4 章によって構成されている。

第 1 章は、「自己」のあり方に関する二人の哲学者の対照的な議論、すなわち永井均によるデカルト主義的議論と野矢茂樹による反デカルト主義的議論を対比しながら批判的に解釈することを通じて、自己に関する哲学的議論が陥りがちな典型的落とし穴を示し、彼らの誤りを乗り越え、自己に関する考察をより豊かなものへと刷新するためには、どのような道が探られなければならないかを論じる。森永氏によれば、永井や野矢の議論は、畢竟、いわゆる「他我問題」の枠組みに囚われているため、自己の私秘性と公共性のいずれか一方の極から出発して、他方の極に到達しようとする構成をとるが、それは決して成功しない。自己の私秘性を立論の出発点とする永井のデカルト主義は、自己の公共性の成立について説得的に論証することができず、そのような議論とは対照的に、自己の公共性から出発する野矢の反デカルト主義は、自己の私秘的な側面に関する考察を自らのうちに十分説得的な仕方では組み込めていないと言わざるをえないのである。こうした議論の陥穽を免れるためには、私秘性と公共性のどちらか一方ではなく、むしろ双方が、等しく根源的に「自己」を構成していることを正しく見て取り、従来の他我問題への対応とは異なる枠組みのもとで探究を再編成しなければならない、とされる。

第 2 章では、私秘的な側面と公共的な側面を併せもつ「自己」の二重性格を論じる新たな枠組みとして、中世哲学の「個体化」論にヒントを得て着想された「自己タイプの例化」という図式が提案される。われわれ各自は、個体的な自己として、世界内に一つだけ存在する「自己トークン」を生きているが、同時にまた、その自己を「自己タイプ」の一例としても理解していると言いうる。このような自己の二重性格は、われわれ各自が、いかなる「差異」の経験において自己自身を識別することによって生成しているのだろうか。そのように問うことが、あるべき本来の自己論の核心をなす問題であるとされるのである。こうした視角から、一人称代名詞の意味論をめぐる議論を抜本的に革新することを狙って、本章では、クリプキの論考“The first person”（2011）が批判的に吟味される。この論考は、カプランの指標詞の理論を継承しながら、一人称代名詞の「意義 Sinn」について論じるフレーゲのテクストを、デカルト的

な（ただし非デカルト主義的な）「コギト」に相当する「自己面識」に基づく意味論を提示するものとして解釈する斬新な論考である。ここにおけるクリプキの立場を、上記の「自己タイプの例化」をもたらす「差異」に関する立場としては批判することを通して、森永氏は、一人称代名詞の意味論をめぐる論争を、次章において提示される自らの自己論によって独創的に捉え返すための道筋を準備する。

第３章では、「自己面識」のような自己完結的な事象に訴えることなく上記の「差異」を捉え直すためのアイディアを求めて、ミードの記号相互作用説や、一人称および二人称代名詞の習得に関する発達言語学の諸研究、さらに現象学的な自己論などが、幅広く参照される。他者と関わりあう何らかの社会性のうちに、自己が自己として成立するための本質的な契機を見出そうとする、それらの諸研究の意義を肯定的に評価しつつも、森永氏は、幼児の一人称・二人称代名詞の習得に関する対立的な立場からの研究にも公平に目を配り、他者との関係が自己の成立の全てではないことの示唆をそこに見て取る。そして、「自己タイプの例化」をもたらす件の「差異」を、これらの諸研究の交点に浮かび上がらせようと腐心しつつ、未だ他人の視点をとって自分を理解できない段階の幼児もまた、自己自身を萌芽的に対象化あるいは焦点化していると言いうることが説得的に主張される。そのような原初的な個体性が「この存在」として、しかも、道具的な世界や他者を介した「力の中心」として生きられる仕方のうちに、単なる自己面識とは異なる「差異」の経験が特定されることになるのである。

第４章では、コギトに関連するクリプキの見解を、再度、より直接的に批判することを目指し、一人称代名詞のさまざまな事例研究を通して、まずはクリプキの議論の基底を支えるカプランの指標詞の理論が再検討される。一人称代名詞の発話が発話者を指示対象としないように見える逸脱的用法や、一人称代名詞の発話において発話者の擬人化が伴う場合に関する先行研究を批判しつつ、こうした場合においても、会話の推意を導く語用論的推論に訴えることで、指標詞の意味論は維持可能であることが論証される。最後に、これまでの議論が今一度総括されたうえで、今後の研究の課題が確認され、論文全体が閉じられる。

以上のように、本論文は、既存の分析的言語哲学の枠組みに収まらない広範な視野に立ち、独自の自己論の図式から、一人称代名詞の意味論に関する先行研究の地平を一挙に乗り越えようとする野心的な研究であり、「自己」をめぐる哲学的探究の最前線に寄与する高い学術的価値をもっている。その論争的な性格のため、本論文は、審査会においてさまざまな質疑、反論を喚起することにもなった。例えば、第３章における自己論の展開が不十分であるため、「自己面識」に定位するクリプキの考察を根本的には批判しえていないのではないかといった疑問、あるいは、第４章において一人称代名詞の逸脱的用法として検討されるべき文例の適切さをめぐる鋭い異議などが提起された。しかし、そうした生産的な論議を喚起しうることは、本論文が、さらに詳密な幾多の個別研究へと結実する可能性に満ちたものであることの証左にほかならず、その高い学術的価値を損なうものではないこともまた確認された。

以上のような評価に基づき、本審査委員会は全員一致で森永豊氏の提出論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。